
Moon Stardust

楓耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Moon Stardust

【Nコード】

N4968U

【作者名】

楓耶

【あらすじ】

20xx年。

地球に四つの光が落ちてくる。その光を追って、侵略者ラスト団が地球へとやってくる。ラスト団は光の源である月の星の王国を侵略し、月の光を奪い、宇宙全土を支配しようとしていた。しかし、月の星の王の力で、五つあるうちの四つを地球へと落とし、一つは、女の人の形へと姿を変え、三つは地球上の人間へと堕ちる。

女の名前はエラ。エラは、月の星の王国の姫であった。

それを追うラスト団の幹部ラビル。月の星の王国から唯一、月の光を奪った男。

光を取り込んだ3人の人間、宇佐美空太、火野タケル、海堂芽衣。地球で出会った5人の地球と月を巻き込んだ恋愛と戦いのストーリーです。

プロローグ

月の中には、地球と同じような空気があつて、水があつて、光があつて、人間と同じような生命体が存在していた。それは、月の一部の中に存在していて、地球に住む私たちからは全く目に見えない存在。

そして、宇宙にはそれ以外にも何万、何億という生命体が存在している。

私たちは、それに気づいていないだけ。

そう、今までは。

20xx年。

ある夜のこと。地球から見た月はいつものように綺麗でまん丸な形をしていた。太陽に照らされた月は、少しだけ、地球の地面を明るく照らした。いつもの月の存在に、地球はいつもの平和そのものだった。

しかし、次の瞬間。

ピカッー！！

地球の空一面に光の光線が降り注いだ。それは流れ星のようにも見えた。何万个もの光の光線が、地球に向かって降ってきたのだ。地球に居た人間たちは、その光にうっとりしたように見上げ、何か唱えているようだった。

「ねえ！！流れ星。綺麗だねえ。」

「あ！本当だ。今日って、何とか流星群とかの日？」

「何とか流星群って…。しし座流星群とかかなあ？ね！たくさんお願いしようよ。私は、何をお願いしようかなあ。」

「俺は、お前とずっと一緒に居れますように…。」

「ありがとう。私も！」

そう、地球には、流れ星にお祈りすると願いが叶うというジンク

スがある。

カップルたちは、幸せそうに願いをこめる。人間たちは、空から降る光に祈りを捧げる。

だから、誰も気づいていなかった。その中で、一際大きな光に。大きな光が四つ、地球へと墮ちたことを。そして、もっと大きな黒い光が地球へと近づいていることも…。

出会い

空太そらたは、仕事で出前の皿回収をしていた。空太は、中華料理屋で見習いコックをしていた。今日は出前のバイトが1人休んでしまったので、空太も出前の手伝いをしていた。中華料理屋で働いて、3年経った。初めは、空太も皿洗いや出前、注文取りばかりしていた。3年して、やっと厨房に入り、料理らしいことをさせてもらえるようになった。

そんなことを考えながら、時間は夜の22時を回っていただろうか。そろそろ、店の片づけを始めなければならぬ時間だった。空太は、急いで皿を回収し、自分のバイクへと向かった。

すると、突然、空が明るくなったのを感じた。空太が空を見上げると、空一面には流れ星のような光の光線が何万、何億と降り注いでいた。

「うお。すげえ!!何だよ、これ!!流星群ってやつかな?よしっ!とりあえず、お願いしとこう。」

空太はそう言うと、両手を合わせて目を瞑った。

「一人前の料理人になれますように…。」
そつつぶやいた瞬間

ばあーーーーーん!!!!!!

空太の目の前を大きな光が横切ったと思った瞬間、後ろから誰かに何かを刺されるような痛みが体を突きぬけ、その場に倒れしまった。

「大丈夫ですか?」

空太の耳元で誰かの声がする。

(誰？女の人？)

「ごめんなさい！私のせいで…大丈夫ですか？怪我とかないですか？本当に、本当にごめんなさい。」

泣きそうな声の女性は、空太の体を揺さぶりながら、必死に謝り続けている。

そんなことはお構い無しに、空太は、むくりと体を起こし、自分の時計を見た。

「ああああー！ー！ー！もう、こんな時間！！！！やばい…店長に怒られる…。うわあああ。急がなくなっちゃ！！」

空太はそう言いながら頭を掻きむしった。

「あの…。」

女が声をかけようとしたが、空太はさえぎるように

「あ、俺なら大丈夫だから。そんなに謝らないで。別に、俺を襲ったわけじゃないよね？ちょっと痛かったけど、血も出てないし…ほらっ。」

そう言いながら、自分の背中をさすって見せた。

「それに、こんな夜遅くに1人じゃ危ないよ。早く帰ったほうがいいよ。じゃあな。」

よほど、店長が怖いのか、空太はあわてるように、置いてあったバイクの方へと走り出した。

「待って！！私、行くところないから、あなたの所に行ってもいいですか！？」

女は大きな声で叫んだ。

大きな声すぎて、急いでいた空太の耳にも聞こえたのか、空太は足を止めた。そして、振り返り、女の方へと向かってくる。その足取りは力強くて、怒りさえ感じた。

「あんた！！頭おかしんじゃないのか？いきなり初対面の男にそんなこと言うなんて！！どうかしてるよ。俺が、おかしなやつなら、今頃あんた、あんなことやこんなことされてるぜ。」

「あんなことやこんなことってなんですか？」

「そこ聞く？」

そう言つと、呆れたような顔をして、ため息をついた。

「ごめんなさい…。本当に行くところがなく…。今日ここに来たばかりで。たぶん、この世界にもお金とか必要なのですよね？この世界のお金は持つていないし…。それに、あなたは光を吸収したから、あなたなら守つてくれると思うから…。」

空太は、馬鹿げたことを言っているなと思いつながら、キラキラした大きな目でまっすぐに見つめる女は、意味不明なことを言いながら、どこか嘘をついているようには思えない気にもなっていた。

「わかつたよ。俺、住み込みだから、店長に頼んでみるから。一緒に来なよ。」

「はい、ありがとうございます。」

そう言つて、ニコリと女は微笑んだ。

「ところで、名前なんて言つんだ？名前はあるだろう？」

「はい、エラと言います。」

「外国の人？日本人ではない名前だよなあ。」

「はい、私、地球人ではないですから。」

「はあ??？」

空太は、この奇妙なことを言うエラを連れて来てしまったことを、正直、後悔していた。言っていることがあまりにも珍妙過ぎて、全く信じれなかったからだ。しかし、深く追求してしまうと怖い気がして、それ以外のことをエラに聞こうとはしなかった。

それから、空太は店に電話して事情を説明し始めた。そして、二人乗りできないバイクを引きずりながら、店までの道のりを二人で歩き出した。

その頃、地球の上空には、原因不明の黒い雲が広がっていた。どこの気象予報士が黒い雲の存在に気づいたようだったが、原因が

わからず、何もできなかった。雨が降るわけでもなく、雷が起こるわけでもなかった。しかし、時間が経つごとに雲は地球に近づき、何かを狙っているかのように暗い影を落としていた。

「ズーヘック様、あと四つの光はこの星に墮ちたことがわかっています。私は、ラビルのように失敗はしません。必ずや光の力を奪って参りますわ。」

「ミアは相変わらずだな。まあ、あれも失敗ではなかった。ラビルが得た力を見よ。ただの人だったラビルが私たちと同じような力を手に入れたのだからな。ほかの力も我らが取り込めば、もっと強大な力を手に入れることができる。そして、宇宙全土を我が物としよう。手始めに、地球もろとも奪おうではないか……。ぐわあはははは。ミア、ノロスを呼べ！手始めに、あいつに何かやらせてみよう。」

「はい、かしこまりました、ズーヘック様。」

真っ赤な唇の女は、今から起こる恐怖のシーンを想像し、舌なめずりしながら、部屋を後にした。

中華料理店・龍火楼

空太とエラは、夜の道をバイクを引きながら、空太の働いている中華料理店「龍火楼りゅうかろう」に到着した。

「スイマセン、店長…。今戻りました。」

「空太！お前どこほつつき歩いてんだよ！！！」

店中に「龍火楼」の店長、王ワンの罵声が飛ぶ。

「あの…。店長さん、彼を叱らないでくださいませんか？」

そこへエラが割って入る。

「おたく、誰だい？」

王は、ちよつとだけ優しい顔になってエラに尋ねた。

「私、エラと申します。実は、先ほど、お仕事している空太さんにぶつかってしまいました…。それで、お仕事の邪魔をしてしまいました。申し訳ありません。」

「なあに！！お嬢さんが悪いわけじゃないよ。悪いのは、ボーッと仕事しているこいつだから。がはははっ。」

そついうと、王は豪快に笑った。

「で、店長、迷惑ついでに頼みがあるんですけど…。あの…、この子をうちの住み込みに…。」

「ええ？なんだって？声が小さすぎて聞こえねえよ。」

「店長！！エラさんをうちの店で住み込みで雇ってもらえませんか！？行くところがないんです。店長！！お願いします。」

空太は店長に頭を下げた。エラも合わせてお辞儀をした。

「エラさん言ったね。行くところないって、何か理由でもあるのかい？」

王は不審そうにエラに尋ねた。

エラは、少し考えてから口を開いた。

「私が話すことを信じてはいただけないかもしれませんが…。」

「

「まあ、いいから話してみな。話さなきゃわからないこともある。」

「はい、店長さん。私、実は本日、月からやって来たのです。」

「え？月？」

エラの言っている事が、王にも空太にもちんぷんかんぷんの事で、今の信じがたい一言に目を丸くするしかなかった。エラは、話を続ける。

「はい。信じていただけないかもしれませんが、私は月の中にある月の星の王国という星の人間です。昨日、私の星が破壊され、消滅してしまいました。私は、国王の力をいただき、この地球へと逃げてきたのです。」

「おい、ちょっと待って、逃げてきたってことは誰かに追われているの？」

空太が口を挟んだ。

「はい。星を消滅させた者たちが私と星の力を狙っています。」

「なんだか、信じがたい話だが…。」

王は、腕組しながら首をかしげた。

「ええ、とても信じれるようなお話ではないと…。」

「まあ、いいさ！俺は難しい話はよくわからないけど、困っている美人をほつとくわけにはいかなからな！いいよ。エラを雇おう！空太、お前がちゃんと面倒見るよ。」

「お！店長、ありがとうございます！。さすが、店長、太っちょだねえ！！」

「空太、お前それ、使い方間違ってるからな。頭良くねえんだから、難しい言葉使おうとすんな。がっはははは。」

王は、大口を開けて笑い出した。

「ありがとうございます、店長さん。私、一生懸命働きます。迷惑かけるかも知れませんが…。それと、もう一つ言っておきたい事が…。」

エラは、ちょっとだけ言いづらそうに、顔を歪めた。そこへすか

さず、王が聞いた。

「なんだい？」

「あ、あの、昨日の流星群を覚えていますか？」

「ああ、覚えてるよ。かなりの量だったし、客もみんなで外に出て、手合わせて拝んでたぜ。」

王が言った。

「俺も覚えてるよ。ガキじゃないけど、俺も星に願いをしちまつたもんなあ。」

空太も照れながら話した。

「あの流星群で、月の力が三つ、この星に堕ちました。そして、地球人の魂に共鳴し、三人の人間にそれぞれ力が取り込まれました。その一つが、空太さん、あなたに堕ちたのです。」

「ええ！！！！？俺？」

空太は驚くような話ばかり聞かされて、さらに目が丸くなったようだった。

「はい。昨晚、空太さんの体を突き抜けたのがそれです。その光には力が宿っていて……。」

「力って、どんな？俺の体、どうなっちゃうんだよ？」

突然の突拍子もない話に、まったく頭では理解ができない。

「それが、どんな力が私にもわからないのです。その光は、共鳴した者の力を引き出す力を持っているのですが、人それぞれ力の形が違うので、私にもどんな力に変化するのか、わからないのです。」

ちなみに、私の父、亡き王には、テレポーターシヨンの力が宿っていました。その力で私は地球へと……。」

エラは、少し悲しそうな表情を見せた。

「じゃあ、俺、どうなるかわからないんだな……。」

空太もまた、少し悲しそうな表情をした。

「しかし、月の力が体に悪影響を及ぼすことはないはずです。地球人には宿ったことがないので、王のような超能力が宿るかはわかりませんが、言い伝えによれば、『月の光が他の星の者に宿りしと

き、全宇宙の危機を救う勇者となり、世界が光に包まれる』とあります。」

ここで、王が口を挟んだ。

「なんか、話が難しすぎて、俺にはよくわかんんだけど、な、空太。女を守るのは男の務めだろう？それに、俺はお前に、エラちゃんの面倒はお前が見ろって言ったよな。だったら、守れ。つべこべ言わずに守れ。面白い力つくんだろう？それ使って、精一杯守れ！！なっ！！」

王は、今までとは比べ物にならないくらい真剣な表情だった。

「店長さん……。」

「わかりました、店長。俺、守ってみせますよ！！よし、今日から俺が、エラのことを守ってやつから！！なっ！！」

「あ、ありがとうございます。それでは、この呪文を……。」

エラは、空太に小さな紙を渡した。空太はそれをゆっくりと受け取った。

「その言葉を唱えれば、空太さんへ宿った力と空太さん自らの力が、最大限に引き出されます。」

「あ、ああ、わかった。忘れないようにしないとな。」

そう言いながら、受け取った紙を自分のポケットに無造作に入れた。

「お前、なんか軽いんだよなあ……。大丈夫か？本当に。」

王は、冗談めかして空太をからかう。

「大丈夫ですよ！！俺、嘘嫌いですから！！」

少しだけ、怒ったような表情を見せて答えた。

「じゃ、部屋は二階にあるから。荷物もそんなについていうか一つもないのか……。布団とかは貸してやれっけど……。明日、店休みだから、服とか買いに行つて来たらいいよ。空太、買い物がてら色々案内してやれよ。給料は……、前貸ししてやつから！！がっははは。」

「店長、せこっ！！。」

「うっせいや！！だまって、従え！！」

「はーい、店長。」

空太は苦笑いしながら、挙手して答えた。

「スイマセン、何から何まで…。」

「良いつてことよ。困ったときはお互い様だし。これからバリバリ働いてもらうから!!じゃ、俺、寝るから。空太、そこ片付けておけよ。掃除さぼったんだから。おやすみ!」

「うっ!!わかりました。やっときまーす。お疲れ様です、おやすみなさい。」

そう言うと、王は二階へと上がっていった。

「空太さん、本当にスイマセン。私なんか来たばかりに…こんな面倒なことに巻き込んでしまった…。」

「まあ、こういうことになったからにはやるよ!!守るし。俺が世界を救うヒーローになれるかも知れないし。ははは。そうはならなくても、困ってる女子をほっとけないでしょ!?!まあ、なるようになるさ。」

空太は、満面の笑みでエラに答えた。エラは、その笑顔を見て、急に涙が止まらなくなってしまった。

「ちよ!!泣かないでよ。俺は女の涙に弱いんだ。さあ、今日はもう疲れてるだろうから、寝よう!ね、寝ようって一緒にじゃないよ?誤解すんなよ。な!」

「は、はい。ふふ。ぐすん。私も片付け手伝いますね。」

エラの顔にはちよっとだけ笑顔が戻り、鼻水をすすりながら、空太の片付けの手伝いを始めた。

空太の葛藤

「突然、そんなこと言われてもなあ…。」
いくら単純な空太でも、今回の出来事は、全く理解ができていなかった。

「月から来たとか、月の力とか、侵略者とか意味わかんねえ…。俺は、結局、どうしたらいいんだろう？店長には、「守れ！」とか言われたけど、どうやって守ればいいんだよ…。侵略者って、強いのか？そんなのに普通の人間の俺が太刀打ちできるわけねえ。つていうか、俺の体、どうなっちまったんだろう…。俺、死ぬのかなあ。」
空太は、頭の中で悶々と考えながら店の片付けをこなしていた。

「空太さん、次は何をすればいいでしょうか？」

エラに話しかけられて、我に帰った空太はちよつとだけハツとした。今まで考えていたことをエラに気づかれたりしていないだろうか…。そんな顔してなかったかどうか…。

「あ、ここは俺がやるから、エラちゃんはまだ寝なよ。疲れただろう。部屋は、二階上がった、一番奥の左側だから。ちゃんと鍵掛けてな。部屋に布団もあるから。ベッドじゃねえけど…。」

「空太さん、本当にご迷惑をおかけしてスイマセン。自分の身は自分で守ればよかったですけど…。では、お言葉に甘えて。おやすみなさい。」

「ああ、おやすみ。」

エラは、そのまま静かに上へと上がって行った。

「月の人も布団に寝るのかなあ…。」

空太の頭の中には、次々と疑問が浮かんでくる。

「なんで、日本語喋れんだよ？やっぱ、姫だから、すっごいお城とかに住んでたんだろうか…。そもそも、月の中ってどうなってるろう？地球みたいに表面に住むんじゃないんだよな？今、月って…。」

「

空太は、ふと窓から外の空を見上げた。

月は出ていなかった…。

「本当に、月は無くなっちゃったんだらうか…。」

「そしたら、地球はどうなるんだらう…。地球も月みたいになくなるのか？俺たち、どうなるんだらう…。」

「……、俺、これ考えてどうすんだらう…。まだ、侵略者つてのも来てない。まだ、どうなるかわからないし、とりあえず、片付け終わらして、俺も寝よう。そう、早いとこ寝よう…。」

空太は、自分に言い聞かせて、それから、何も考えず、黙々と仕事をこなした。床の掃除とテーブルの掃除、フライパンや皿の片付け、店の戸締りの確認、いつもの作業をこなして、空太も二階の自分の部屋へ上がった。

空太が部屋に戻り、布団に横になっていた頃、店の位置から南西の方角に、また一つの光の塊が光るのが目撃された。しかし、目撃した人間はいなかった。目撃したのは、そこにいた一匹の犬とそこに咲いていた一輪の花だった。

ただ、その光は、月の光に似ていたが、少し違った色をしていた。美しい輝きとは違い、薄いベールのように黒い影が覆っているようだった。

そして、光は、静かに地球に降り立ち、人間の形へと姿を変えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968u/>

Moon Stardust

2011年10月9日10時29分発行